

多様性を尊重し、課題解決を図る主体性を育む

はじめに

教師海外研修に参加させていただき、ナミビア共和国やそこで暮らす人々から多くのことを学んだ。多様な民族がいて、それぞれに独自の文化があることや、自分や相手のアイデンティティを認め尊重すること。人々の温かさ、豊かで壮大な自然、自然に対する人々の畏敬の念。日本と通ずることもあったが、日本では感じられないナミビアの素晴らしさや魅力を感じられた。一方で、失業率の高さや、産業構造の偏り、貧富の差などの課題もあり、それらには様々な背景が絡まり合っている現実を目の当たりにした。

自分にとっての「当たり前」が他者にとっての「当たり前」でないことを理解し、多様性を尊重する。そして、自分ごととして課題解決しようとする主体性を身につける。私は生徒に「誰にとっても生きやすい社会の担い手」になってもらいたいという思いから教材作成に至った。

この教材の使い方・参加のルール

この教材では、自分らしさを表現し、お互いの良さを見つけ合うアクティビティを行うことで、お互いを認め合うような寛容性を高める。その後ナミビアについて知り、特徴をつかみ、級友と課題解決的な学習を行う。3つのアクティビティがあるが、連続して使用することも、独立して使用することもできる。

アクティビティ1 「自分だけの靴下をデザインしよう！」

●概要

自分だけの靴下をデザインし、靴下のイラストやポイントなどを伝え合う。また、ナミビアでの多文化共生の様子や取組みについて知る。

●ねらい

- ・色や柄などを工夫することで、自分らしさを表現する。
- ・多様な価値観や個性に触れ、お互いを認め合う態度を育てる。

●主な対象

小・中学生～

●用意するもの

- ・色鉛筆：一人1セット
- ・ワークシート①（P124～125）：全員分
- ・ふせん

●所要時間

50分

● すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1. ナミビアにおける慈善活動や多様性を認め合うための取組みについて知る。 2. 自分だけの靴下をデザインしよう！ ワークシートを配布する。各自ワークシートに靴下のデザインを描く。デザインのポイントや込めた思いも書く。 3. お互いの作品を鑑賞し、素敵だと思ったところを伝え合おう。 それぞれのワークシートを共有し、素敵だと思った点をふせんに書き、相手のワークシートに貼る。	ショッピングモールで見つけた「FUNKY SOCKS DAY」の取組みや、JICA海外協力隊員の配属先の小学校での「私服Day」などについて紹介する。 鑑賞の時間が仲の良い友人同士のみでの活動にならないよう、「同じ誕生月の人」「出席番号の1の位が同じ人」「血液型が同じ人・違う人」など、条件をつける。
ふり返し（発表） 活動を通しての感想を書き、発表する。	

● 用語の解説、資料・解説

・「FUNKY SOCKS DAY」

Breadline Africa（1993年に南アフリカ共和国のケープタウンによって設立された非営利団体によって制定された。ステッカーを購入し、FUNKY SOCKS DAY（2023年は9月8日）にそのステッカーを貼り、独創的な靴下を履く（左右違う靴下も可）というアクション。首都ウイントフックのマエウラモール内のPNAという文房具店（南アフリカ共和国系列）にて実際にステッカーを購入した。ステッカー代は10ナミビアドル（日本円で約80円）。ステッカー代は学校のインフラ整備や設立等に役立てられるとのこと。類似の取組みとして、イギリスの「Odd Socks Day」というものがある。いじめ防止週間の期間中に左右違う柄や独特な柄の靴下を履き、違いを認め合う意識を高めるそう。



ステッカー（文房具店で購入）



文房具店に貼られていた
FUNKY SOCKS DAYのチラシ

コラム

教師海外研修で訪問したエロンゴ州カリビブのイーベンハーサー小学校では、森結香隊員が児童に算数を教えていた。森隊員との質疑応答の時間に、日本にはない学校行事の話になった。イーベンハーサー小学校では月1回か2か月に1回程度、私服登校日があり、児童たちは思い思いの私服を着て登校するそう。また、独立記念日の前日はお祭りがあり、民族ごとの衣装で登校したりダンスを踊ったりするそう。多様な民族が共存するナミビアだからこそ、アイデンティティや個性を尊重するような活動を知ることができた。ふと、日本の学校の様子を思い浮かべた。ナミビアと日本とでは歴史的・社会的背景が異なるとはいえ、ナミビアの学校から学ぶべきことがあるのではないだろうか。



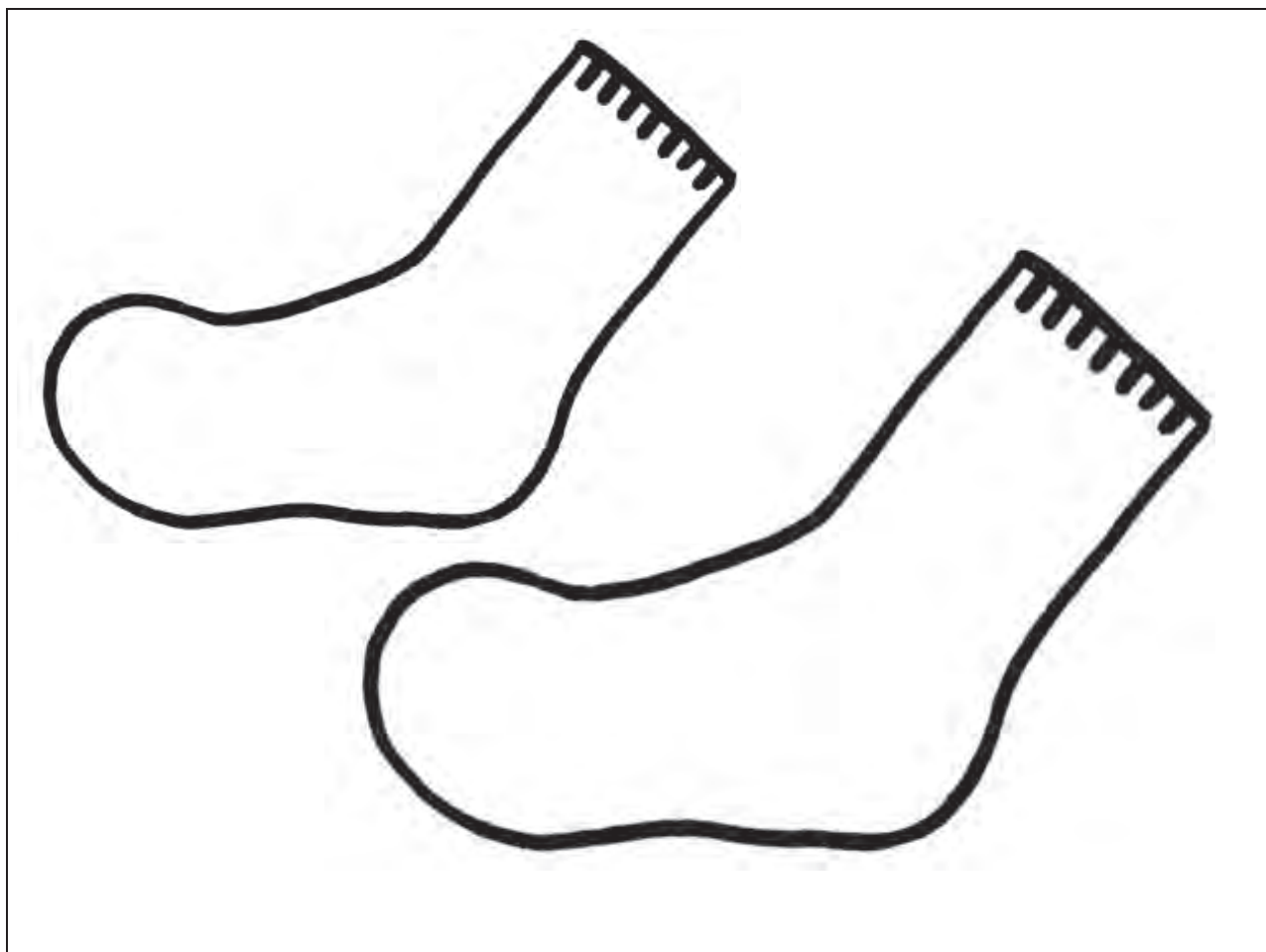
民族のダンス

自分だけの靴下をデザインしよう！

()年()組()番 氏名()

☆ 自分だけの靴下をデザインしてみよう！靴下ならデザインを完全に見せるファッションもできるし、人には見せず自分だけで楽しめるようなファッションもできますね。好きなものを入れてデザインしたり、個性的な形・色合いにしたり…。自由に描いてみよう。

【靴下のデザイン】



○ ポイント、靴下に込めた思いなど

(裏面)

○ クラスメイトより

※コメントを書いてもらったふせんをこのスペースに貼ろう。

○ デザインをしての感想

○ クラスメイトとの意見交換をしての感想

○ どのようなことを学びましたか。また、今日の学びをこれからどのようにいかしたいですか。

アクティビティ2 「ナミビアを知り、感じよう！」

●概要

ナミビアについてのクイズや実物を通して、ナミビアを知り、感じる。

●ねらい

ナミビアについて知り、文化に親しみを持つ。

●主な対象

中学生

●用意するもの

ワークシート② (P128～129)：全員分
クイズ・写真・実物

●所要時間

10～15分×4回（通して行っても良い。）

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
○テーマごとにクイズ形式でナミビアについて知る。	
1. 自然環境	【答え】
Q 1：ナミビアにある砂漠は世界で一番〇〇な砂漠。〇〇に当てはまるのは？	A 1：古い（ナミブ砂漠の砂を触るなど、なるべく現物に触れる時間を設ける）
Q 2：ウイントフックの標高は約何メートル？	A 2：1650m
2. 歴史・文化	
Q 3：ナミビアは西暦何年にできた国でしょう。	A 3：1990年（市場で購入したスパイスの香りを嗅いだり、民族のダンスを見る→ドイツによる植民地支配、南アフリカ共和国に占領されていたことや、南アフリカから受けたアパルトヘイトの影響が今でも残っていることを知る）
Q 4：私がナミビアで食べていない食べ物は何でしょう。次の中から一つ選んで下さい。	A 4：ガの幼虫
①オリックスの肉	
②牡蠣（カキ）	
③ガの幼虫	
④お寿司（すし）	

3. 経済 Q 5 : ナミビアでは、何が一番輸出されているでしょう。 4. 課題 Q 6 : ナミビアでは〇〇率が世界第 2 位。何率？	A 5 : 宝石・貴金属 輸出品の割合や品目に着目し、特徴を考える。→ナミビアも他の国と同じようにモノカルチャー経済の傾向にあることを知る。 A 6 : 失業率 「失業率が高いと、どのような影響が生じるだろう？」と考える。
ふり返し（発表） 日本との違いやナミビアの良さについて考える。	

Let's study and feel about NAMIBIA !

氏名 ()

【世界地図】



(1) 自然環境

〈地形〉

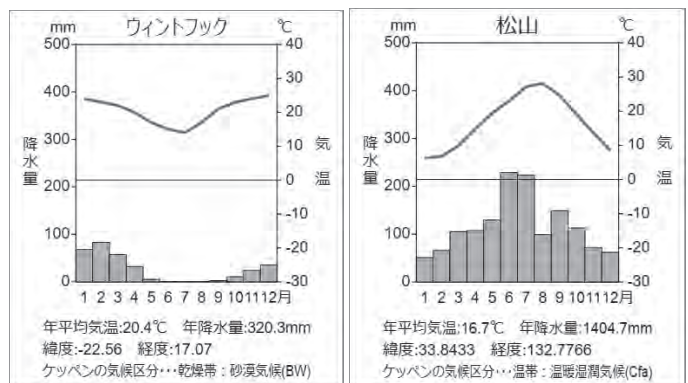
○ナミブ砂漠：世界で一番(①)砂漠

○首都ウィントフックの標高：(②)m

〈気候〉

○(③)気候、サバナ気候など

〈雨温図〉



☆ナミブ砂漠の砂に触れて

○ウィントフックと松山の雨温図を比べて

(2) 歴史・文化

〈歴史〉

1884～1915 : (①) による植民地支配

1915～ : (②) による支配

→ (③) の影響

人種隔離政策

(④) : ナミビア独立

〈文化〉

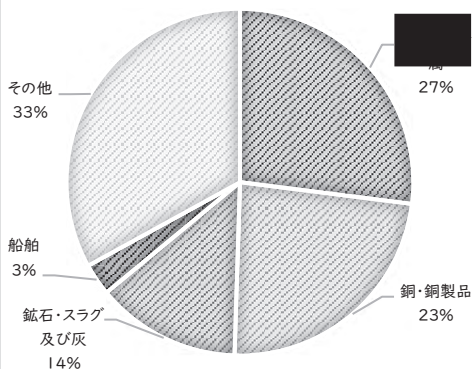
○言語 : (⑤) (公用語)、アフリカーンス、ドイツ語
コエコエ語、ヘレロ語、コイサン語など

☆ダンスを見て

☆スパイスを嗅いで

(3) 経済

輸出品の割合



☆左の「ナミビアの輸出品」を見て…

グラフの特徴は？読み取れることは？

(4) 課題

ナミビアの課題

- ・ (①) 率 = 世界第2位
→ 高いと人や地域、国にどのような
影響が及ぶだろう？

〈解答〉 (1) ①古い ②1650m ③砂漠 (2) ①ドイツ ②南アフリカ共和国 ③アパルトヘイト
④1990年 ⑤英語 (3) ■…宝石・貴金属 (4) ①失業 失業率が高いことで及ぶ影響 ・賃金を得られない
・食料を得られない ・医療を受けられない ・教育を受けられない ・治安の悪化など

アクティビティ3 「ナミビア産業プロジェクト」

●概要

ナミビアおよびアフリカ州の学習を「ナミビア産業プロジェクト」と題し、ナミビアで産業をおこすことを考えた。JICA教師海外研修で訪れた小学校の児童たちは職業フェスタに参加した経験があり、多くの小学生が自分の将来の夢を抱いていた。しかし、ナミビアの失業率は世界第2位、多くの児童たちの親は職が無いという現状であった。新たな産業を興す場合、ナミブ砂漠の「ナミブ」とは先住民の言葉で「何もない」という意味である。しかし、実際に訪れてみると壮大な自然やナミブ砂漠特有の植生、多様な民族の文化、そこに生きる人々の豊かな心など、多くの魅力を感じた。そこで、ナミビアにあるものを有効活用して、人々が自立できるような産業を興すプロジェクトを考えるアクティビティを行った。

●ねらい

- ・主体的に課題を解決しようとする態度を養う。
- ・現地の人の立場や世界の人々、持続可能性等を考慮しようとする態度を養う。

●主な対象

中学生

●用意するもの

- ・資料（文献、写真など）
- ・タブレット端末（ロイロノートスクール）

●所要時間

3時間

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1. 課題の設定について説明する。 ナミビアの失業率を改善するためのアドバイザーになったという設定で考える。	
2. 全体でナミビアにあるものを挙げていく。	本時までに見た写真や資料等を振り返りながら、クラス全体でブレインストーミングする（ロイロノートスクールの共有ノートを使用）。
3. 産業やその種類について知る。	第一次～第三次産業までを紹介する。
4. 挙げられた産業やその種類から、どの分野、内容、何を使ってプロジェクトを考えたいか選び、班に分かれる。	現地の人が自立できるようなプロジェクトであるか、持続可能な開発であるかなど、我々の一方的な押しつけにならないようにプロジェクトを考える前に視点を提示する。

5. 選んだものから、どのようなプロジェクトを進めるか考える。 6. 班ごとにプロジェクトのプランを考え、プレゼンテーションの資料を作成する。 7. 発表 発表するグループはスライドを提示する。 聞く人は、良い点や改善点を見つける。	日本や諸外国の技術を生かせないか、様々な企業のホームページを参考にしよう助言する。
ふり返し（発表） 自分の班の発表や、他の班の発表を聞いてふり返しをする。	他の班の人が書いた感想は、印刷してそれぞれに配布する。

●用語の解説

- ・産業の分類：第1次産業…農林水産業
第2次産業…建設業、製造業
第3次産業…商業、サービス業
- ・ナミビアの失業率：世界第2位（2021年、ブルームバーグ調査）

コラム

開発協力大綱における普遍的価値とは何を指すのか？

海外研修初日のオリエンテーションにて、「開発協力大綱における普遍的価値とは何か」「ナミビアの経済発展を促す国際協力のあり方は普遍的価値につながるのか？例えばウォルビス・ベイを開発することで環境破壊なども起こるかもしれない。低賃金で働いている港湾労働者がいることで、経済格差が是正されないのではないか？」というような質問があった。私自身も、経済発展を遂げるということは環境破壊や経済格差の拡大につながるということを感じていた。その質問に対し、JICAナミビア支所の洲崎支所長は次のように答えた。「日本だけでなくどの国も“ナミビアはこれをした方がいいよね”と思えるような協力をするということが我々の考える普遍的価値に基づく協力であるだろう。」「いろんな途上国、先進国があるが、多くの人たちがそれは間違っていないよねと言えるであろうことは、“それぞれの国民が暮らせる、生きていける”ということ。低賃金であろうがなんだろうが、職につけない人たちにどのように職を提供するかということが大事。国民として生まれたけど、生きていくのにつらすぎるという人をできるだけ減らすというところからスタートする。」

また、在ナミビア日本大使館の2023年9月版「ナミビア月報」に「人口10万人あたりの自殺率がアフリカで一番高い」という記述があった。ナミビア警察の統計によると、犠牲者の82%が男性であり、失業、貧困、うつ病、絶望、家族問題、自尊心の低下が自殺の一般的な原因であったそう。

“生きていくのにつらすぎる人”をできるだけ減らすにはどうすれば良いか。洲崎支所長の言葉やナミビアの失業率が世界第2位・自殺率がアフリカで第1位というデータ、小学校を訪問した際に聞いた“多くの保護者が失業している”という現実が、本アクティビティを考えるきっかけとなった。

●パワーポイント、ワークシート（見本）

あなたは、ナミビアの失業率を改善させるための産業プロジェクトを考えるアドバイザーになりました。ナミビアにあるものをいかして、現地の人々が自立して暮らせるようなプロジェクトを考えましょう。

ナミビアにあるものを
あげてみよう！

ナミビア産業プロジェクト

プロジェクト名

概要

- ☐ 第一次産業（農林水産業）
☐ 第二次産業（製造業・建設業）
☐ 第三次産業（商業・サービス業）

プロジェクトの詳細

ナミビアの（ ）を使って（ ）をする

必要なもの

必要な技術

他国での例

プロジェクトを成功させるために必要なこと

対象
（国・地域・年齢層など）

持続可能性は？

他国からの支援
（国、企業など）

懸念されること

解決方法

寄与ポイント
会

このプロジェクトに込めた思い

SDGsの向上（何を向上させることができるか）



↑ 向上させられるものに○をつけよう。

おわりに

相手の文化を尊重し、敬意を持って人々と接していたナミビアの人々の姿がとても印象的であった。これからの未来を担っている生徒には、多様性を認め合える社会をつくってもらいたい。そのために、私自身が学級・学校をそのような社会集団にしていきたい。

また、教師海外研修を通して、相手に寄り添いつつ自ら学ぼうとする姿勢が大切だと感じた。相手に寄り添うためには、表面的なものだけではなく、直接的に見えないものも見えるようになる必要がある。そのためには、多面的・多角的に物事を捉える力が必要である。今後はそのような生徒を育成させられるような教材を開発していきたいと思う。

参考文献・引用資料

〈書 籍〉

- ・『ナミビアを知るための53章』 水野一晴、永原陽子編著
- ・ Namibia Publishing House 『NEW NAMIBIAN SCHOOL ATLAS』

〈ホームページ〉

- ・ FUNKY SOCKS DAYを設立した団体のホームページ：<https://breadlineafrica.org/>
- ・ 実際にステッカーを購入した、PNAという南アフリカ共和国系列の文房具店のホームページ
<https://www.goodthingsguy.com/lifestyle/funky-socks-day-2023/#:~:text=South%20Africa%20%2818%20August%202023%29%20%E2%80%93%20The%208th,improving%20schools%20in%20vulnerable%20communities%20across%20the%20country>
- ・ イギリスのOdd Socks Dayに関するホームページ：
<https://anti-bullyingalliance.org.uk/anti-bullying-week-2023-make-noise-about-bullying/odd-socks-day/what-odd-socks-day>
- ・ ウェブサイト「The World Bank」 <https://www.worldbank.org/en/home>
- ・ 在ナミビア日本大使館「ナミビア月報」 2023年9月
<https://www.na.emb-japan.go.jp/files/100573467.pdf>

実践事例報告

プログラム作成・実践者

寺田 美優

学 校 名

松前町立岡田中学校

担当教科

社会

実践教科

中学校社会科（地理的分野）、特別活動など

単 元 名

「世界の諸地域 アフリカ州」

【授業の概要】

(1) 単元のテーマ

アフリカ州について知り、課題を捉え、解決する方法を考える。

(2) 単元のねらい

- ・アフリカ州について概観するとともに、ナミビアの実態について知る。
- ・アフリカ州（ナミビア）の課題を捉え、主体的に課題に取り組む態度を養う。

(3) 授業の概要

学級活動では、多様性を尊重する態度を育むために、アクティビティ 1 を実施した。社会科の地理的分野の授業では、アフリカ州とナミビアを絡めながら授業を実施した。自然・環境、歴史・文化、経済、課題の 4 つの分野について、アフリカ州全体を概観するとともに、ナミビアの実態についても触れた。ナミビアの地形や気候、民族、国の歴史、輸出の状況についてクイズを出したり、ナミビアで入手したもの（ナミブ砂漠の砂、市場で入手したスパイス、伝統的な布を用いた製品、現地のダンスの動画等）に五感で触れさせたりして、ワークシートに感じたことや学んだことを記入させた。

また、学習のまとめとして、ナミビア産業プロジェクトと題し、失業率の高いナミビアにおいて、産業を発展させるためのプランを考えるというアクティビティを実施した。

(4) 指導上の留意点

1 時間目から 4 時間目の授業については、アフリカ州を概観しつつ特にナミビアをクローズアップして取り上げた。そのため、ナミビア＝アフリカとならないよう、他のアフリカ州の国々の資料も使用した。アフリカ州には多くの課題があり、それらが複雑に絡み合っている。しかし、「かわいそう」「〇〇が足りない」というような偏ったイメージにならないよう、日本にはない素晴らしさを伝えられるよう努めた。

(5) 生徒の感想や学び・気づき

全ての授業を終えての感想では、「手で食べ物を食べるのか～と思ったが、日本ではおはしで食べるのが当たり前のように、ナミビアでは手で食べるのが当たり前なんだと思った。」「日本と国と国との距離も遠いので、文化や環境が大きく違う。でも、全く接点がないわけではないということが分かった。文化が違うからこそ新しい考えを知ることができるし、環境が違うからこそ無いものを補い合って助け合っていきたい。」「ナミビアにあるものをいかして産業プロジェクトのプランを考えるなかで、ナミビアの環境や町について自分で調べたり、商品のデザインを決めたりするのがとても楽しかった。」など、様々な感想があがった。自分自身の当たり前を問い直すものや、日本とナミビアと

の関係性について書いているもの、産業プロジェクトについての感想が多かった。

(6) 生徒の様子



プロジェクトを考えている生徒たち



プロジェクト発表の様子

【授業実践をした上での感想・ふり返し】

ナミビアでの学びをエッセンスとして、授業に溶かし込むということは思ったよりも難しく感じた。生徒に伝えたいことがたくさんあったため、何に重点を置くか悩んだが、「多様性を認めること」「主体的に課題解決しようとする態度を身につけてほしい」という軸を大切にして授業を実践できたように感じる。

今回の授業実践では生徒から学ぶことがたくさんあった。ナミビア産業プロジェクトでは、ナミビアで採れる牡蠣の殻を使用したチョークの製造や、ナラという独自の植物を使用した化粧品の製造などのアイデアが提案されていて、生徒の柔軟な発想に驚かされた。

教師海外研修の事後研修で、過年度に教師海外研修に参加されていた先生が「先生が挑戦しようとする姿勢を生徒は見ている。」と言われていた。教師海外研修で学ばせていただいた経験は一生ものである。これからも挑戦する姿勢を大切に、国際教育を継続させたい。